

榛原町内遺跡発掘調査概要報告書 1991年度

榛原町文化財調査概要 8

1992

榛原町教育委員会

榛原町内遺跡発掘調査概要報告書 1991年度

榛原町文化財調査概要 8

1992

榛原町教育委員会

## 序

奈良県の東方に位置する榛原町は、古くから交通の要衝として重要な位置にあり、町内各所に多くの文化財が存在しています。当委員会では、各種文化財の調査を計画・実施しており、本書は下井足カワタ遺跡と戒場遺跡の各発掘調査概要をまとめたものです。

いずれも小規模な発掘調査ではありましたが、下井足カワタ遺跡では弥生時代から中世の遺物・遺構を検出することができました。また、戒場遺跡では平安時代末葉から中世の建物遺構や遺物を確認することができました。本書が今後の調査・研究に資するところがあれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査に際して、ご協力・ご援助を賜りました奈良県教育委員会をはじめ関係諸機関ならびに地元関係各位に厚くお礼申し上げますと共に今後とも一層の御指導、御援助の程よろしくお願い申し上げます。

平成4年3月

榛原町教育委員会

教育長 山尾正弘

## 例 言

- 1 本書は、奈良県宇陀郡榛原町内に所在する「榛原町内遺跡」の発掘調査概要報告書（榛原町文化財調査概要8）で、下井足カタ遺跡・戒揚遺跡の各発掘調査概要を収録している。
- 2 調査は、平成3年度（1991年度）国庫補助事業・県費補助事業として榛原町教育委員会が実施し、平成3年9月1日に着手し、平成4年3月31日に終了した。
- 3 現地調査は、奈良県教育委員会の指導のもと榛原町教育委員会技師 柳澤一宏が担当した。
- 4 調査組織および関係者は、各本文中に詳しい。
- 5 各遺跡の調査記録、遺物等は榛原町教育委員会において保管している。
- 6 本書の執筆・編集は、柳澤が担当した。

# 目 次

I	埋蔵文化財発掘調査の概要	1
II	位置と環境	3
1	地理的環境	3
2	歴史的環境	3
III	下井足カワタ遺跡発掘調査概要	9
1	調査の契機と経過	9
(1)	調査の契機と経過	9
(2)	現地調査日誌抄	9
2	位置と環境	10
3	遺跡の調査	13
(1)	調査区と基本土層	13
(2)	検出遺構	16
(3)	出土遺物	18
4	ま と め	20
5	抄 録	20
IV	戒場遺跡発掘調査概要	21
1	調査の契機と経過	21
(1)	調査の契機と経過	21
(2)	現地調査日誌抄	21
2	位置と環境	25
3	遺跡の調査	25
(1)	調査区と基本土層	25
(2)	検出遺構	27
(3)	出土遺物	35
4	ま と め	42
5	抄 録	42

## I 埋蔵文化財発掘調査の概要

榛原町では、1968年（昭和43年）以降、土木工事等の開発行為にともなう埋蔵文化財の発掘調査が本格的に行われており、その件数は増加傾向にある。今後も町内各所で多くの開発行為が計画されており、埋蔵文化財の取り扱い等について協議を重ねているところである。

当委員会が扱った1991年度（平成3年度）の発掘届・通知、発掘調査等は表1・2のとおりである。これらのうち、本書には下井足カワタ遺跡、戒場遺跡の各発掘調査概要を収録している。

表1 発掘届・発掘調査件数等一覧表

摘要	年度	1987	1988	1989	1990	1991
発掘調査届（民間）		3	2	0	4	4
発掘調査通知（公共）		6	13	6	9	4
遺跡踏査願		1	4	3	4	2
発掘調査（町教委担当）		4	4	3	7	7
立会調査（町教委担当）		2	3	1	0	0



写真1 榛原の市街地遠望

表2 1991年度発掘調査地等一覧表

番号	標野町遺跡番号	遺跡名	調査地	現地調査期間	発掘原因 (原因者)	調査概要		備考
						遺構	調査対象物	
1	1-113	萩原西高田遺跡 HAGIYAMA NISHI TAKAHATA	標野町萩原	1991・4・15~1991・5・10	宅地造成工事 (三和相互㈱)	土坑(土壌) 24	土師器、陶磁器、鉄釘、銭貨	
2	1-24	萩原前川遺跡 HAGIYAMA MAEKAWA	標野町萩原	1991・6・10~1991・6・12	共同住宅新築 工事 (松原建設㈱)	なし	サスカイト片、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器	
3	4-23	八尾長段遺跡 YATTAI NAGATAI	標野町八尾	1991・6・25~1991・7・2	農地造成工事 (標原町)	なし	弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、瓦葺土器	
4	2-60	下井足敷山古墳群 SHIMIZUKI YAMA KOFUN	標野町下井足	1991・5・21~1991・8・13	町道拡張工事 (標原町)	古墳3基、土坑、ピット	サスカイト片、須恵器、土師器、鉄鎌、鉄刀子、瓦器、銭貨	標野町文化財調査 報告7
5	1-115	萩原狐ノカ遺跡 HAGIYAMA KUNOKA	標野町萩原	1991・7・30~1991・8・23	宅地造成工事 (三晃住宅㈱ ほか)	なし	土師器、鉄釘、銭貨	
6	1-100	下井足カマタ遺跡 SHIMIZUKI KAMATA	標野町下井足	1990・8・8~1990・8・22 1991・9・4~1991・9・30 1991・9・4~1991・9・30	道幅新設工事 (標原町)	溝	須恵器、土師器、鉄釘	
7	3-1-2	成勢遺跡 SUGIYAMA	標野町成勢	1991・10・23~1991・12・6	農地造成工事 (標原町)	土坑、溝、ピット	サスカイト片、須恵器、土師器、鉄釘	本報告
8	2-283~ 285	行者山古墳群 YUKUJIMA KOFUN	標野町堂間	1991・12・21~1991・12・26 1992・1・12、1992・1・20	(測量調査)	独立柱礎物跡、溝、土坑、ピット 前方後円墳1基、円墳2基	サスカイト片、須恵器、土師器、瓦器	本報告 標野町文化財調査 報告7

## II 位置と環境

### 1 地理的環境

奈良県の東方の山間部に宇陀と呼ばれている地域が広がっており、現在の行政区画では、大宇陀町、榛原町、菟田野町、室生村、曾爾村、御杖村からなっている。この宇陀地方は、地理的な状況から西半と東半に大別でき、一般に前者が「口宇陀」、後者が「奥宇陀」とも総称されている。口宇陀は標高 300 m～400 m の丘陵とこの間を縫って流れる中小河川が複雑に入り乱れ、これらが幾つもの小盆地や浅い谷地形を形成しており、口宇陀盆地とも称され、大宇陀町、榛原町、菟田野町の大半がここに含まれている。これに対し、東部の奥宇陀山地とも呼称されている。

口宇陀地域の主要河川は、西に宇陀川、東に芳野川があり、幾つもの小河川を合わせながら榛原町萩原で宇陀川本流となる。榛原を後にした宇陀川は三重県で名張川となり、木津川、淀川を経て遠く大阪湾へと至り、大和川流域とは水系を異にしている。

榛原町の四周は概ね標高約 400 m～800 m の山塊に囲まれ、東は高城岳、三郎岳、室生村へと通じる石割峠があり、北は大和高原とをわける額井岳、香酔山、鳥見山などの山々が屏風状に連なり、宇陀の地を見下ろしている。西は桜井市や大宇陀町、南は菟田野町となっており、丘陵をもってそれぞれの境界としている。地形的にみれば榛原町の西半は口宇陀、東半は奥宇陀的な様相を呈している。



図1 榛原町位置図

### 2 歴史的環境

宇陀地方は、『古事記』、『日本書紀』をはじめとする多くの文献にも度々登場し、軍事・交通の要衝であったことを窺い知ることができ、今に残る地名、伝承等も多い。

榛原町を流れる宇陀川・芳野川・内牧川流域の各所には多くの遺跡が分布しており、発掘調査・分布調査を重ねるにしたがって、その数も増加している。

これまでに、町内では3点の有舌尖頭器が出土している。これらの時期は、旧石器時代末期から縄文草創期に求めることができ、この頃が宇陀の歴史の初源であろう。

縄文時代の遺跡の多くは、先述の河川流域の河岸段丘上、尾根上、谷部等に認められる。これらの遺跡の多くは、採集遺物によっているため、その実態が必ずしも明らかとはいえない。また、発



掘調査によって確認された場合でも、数点の遺物が出土しているのみで、遺跡の全容が明らかになったものは少ない。このような状況のもと高井遺跡では、早期から後期にわたる集落跡であることが発掘調査によって明らかとなっている。

弥生時代前期から中期の遺跡は数少ないが、後期に属するものは比較的多く確認している。これらは、地理的制約のためか、奈良盆地で見られるような大規模な集落ではないが、次代の古墳時代へと継続するものが多い。

弥生時代後期から古墳時代前期の墳墓である方形台状墓は、これまでに野山遺跡群、能峠遺跡群、下井足遺跡群、大王山遺跡群、キトラ遺跡などで確認されている。この頃の集落としては、戸石・辰巳前遺跡、高田垣内遺跡、能峠中島遺跡、上井足北出遺跡、谷遺跡などを挙げることができ、谷部を流れる川跡や竪穴式住居跡などが確認されている。

古墳時代前期の古墳は谷畑古墳、中期の古墳としては高山1号墳、シメン坂1号墳、前山1号墳などが発掘調査によって明らかにされている。後期となると古墳数は著しく増加し、ある程度の粗密があるものの、町内各所の尾根上には数基から十数基単位で分布している。5世紀後半から盛期を迎える古墳群は野山古墳群、沢古墳群、栗谷古墳群、大王山古墳群、丹切古墳群などが知られている。6世紀後半以降、今までの木棺直葬墳にかわって横穴式石室墳が築造されるようになり、丹切古墳群、能峠古墳群、石田古墳群、大貝古墳群、西谷古墳群をはじめ、多くの古墳が発掘調査によって状況が明らかになっている。

横穴式石室にかわる新しい葬法として登場してくるが、最も代表的なものが、壬申の乱で活躍した将軍のひとりで渡来系氏族でもある文祢麻呂の墳墓である。現在、墳墓は史跡、墓誌などの出土品は国宝となっている。

古代末には宇陀においても荘園の開発が急速に進み、このなかで、台頭してきた在地武士団は、興福寺、春日社などの支配のもと各自が発展を続けた。この武士団は「宇陀三人衆」の秋山氏・沢氏・芳野氏に代表され、彼らは秋山城・沢城・芳野城をそれぞれの居城としていた。また、小規模な城館跡も各所に点在しており、城館の廃絶後、中世墓地と化したところもある。いわゆる中・近世墓地は、まとまったところでは、大王山遺跡、能峠遺跡群、八咫鳥遺跡群、野山遺跡群などが知られている。

(参考文献等省略)

表3 榛原町遺跡分布図(図2)対照表

番号	遺跡名	所在地	遺跡概要	時代	備考
1	鳥見山中腹遺跡	榛原町萩原	遺物散布地	縄文～弥生	一部削平
2	岩尾火葬墓	榛原町萩原	火葬墓	奈良	
3	南山古墳	榛原町萩原	円墳(磚積石室)	古墳後	
4	清水谷遺跡	榛原町萩原	遺物散布地	弥生～古墳、中世	
5	天の森遺跡	榛原町萩原	遺物散布地	縄文～弥生、中世	
6	西峠古墳	榛原町萩原	円墳(磚積石室)	古墳後	
7	萩原前川遺跡	榛原町萩原	遺物散布地	弥生、古墳、中世	
8	萩原西高田遺跡	榛原町萩原	近世墓	江戸	
9	萩原狐ヅカ遺跡	榛原町萩原	遺物散布地、近世墓?	江戸	
10	キトラ遺跡	榛原町萩原	方形台状墓、中世墓	古墳前、中世	
11	谷畑中世墓地	榛原町萩原	中世墓地	室町	
12	谷畑古墳・神木坂古墳群	榛原町萩原	円墳(木棺)、方墳(横穴式石室、磚積石室)	古墳前・後	
13	奥ノ芝古墳群 福地誠郎遺跡	榛原町福地	円墳(木棺、磚積石室)、住居跡、誠郎	古墳前・後 中世	1-2号墳調査(1985年、1号墳は地盤改良工事で撤去)
14	長峰古墳群	榛原町長峰	円墳群	古墳	
15	北谷古墳群	榛原町福地	前方後円墳・円墳(横穴式石室)	古墳後	
16	不動堂古墳群	榛原町檜牧	円墳(横穴式石室)	古墳後	
17	石風呂古墳	榛原町檜牧	円墳(横穴式石室)	古墳後	
18	石風呂遺跡	榛原町檜牧	遺物散布地	縄文、古墳、中世	
19	丹切遺跡	榛原町萩原 下井足	遺物散布地	縄文～中世	
20	丹切古墳群	榛原町萩原 下井足	円墳(木棺直葬、横穴式石室)ほか	古墳後	
21	下井足カワタ遺跡	榛原町下井足	遺物散布地	弥生、古墳後、奈良	本報告
22	下井足古墳群	榛原町下井足	方形台状墓、円墳ほか	古墳前～後	城山古墳群、谷古墳群、下井足古墳群
23	井足誠郎	榛原町下井足	誠郎	中世	
24	愛宕山古墳	榛原町上井足	円墳(石室)	古墳後	谷支群
25	谷遺跡	榛原町上井足	集落跡	弥生～古墳	
26	熊峠遺跡群	榛原町上井足	方形台状墓、円墳、小型横穴式石室、集落跡、誠郎、中世墓地ほか	縄文～江戸	北山地区、南山地区、西山地区、中島地区
27	上井足ワラ田古墳	榛原町上井足	円墳、竪穴系横口式石室2、甕形木棺	古墳後	
28	前山1号墳	榛原町上井足	円墳(割竹形木棺)	古墳中	
29	上井足北出遺跡	榛原町上井足	集落跡	縄文～中世	
30	高田垣内遺跡群	榛原町上井足	集落跡、前方後円墳、円墳、方墳、横溝ほか	縄文草、弥生～江戸	
31	大王山遺跡群	榛原町下井足 堀家	住居跡、方形台状墓、前方後円墳、円墳、土器墓、寺跡ほか	弥生～江戸	
32	藤菜アサマ遺跡	榛原町藤菜	遺物散布地、中世墓	弥生～古墳、中世	
33	ダケ古墳	榛原町雨部	前方後円墳(竪穴式石室)	古墳後	
34	澤ノ坊2号墳	榛原町笠岡	前方後円墳	古墳前～中	
35	石橋垣内遺跡群	榛原町笠岡	集落跡、古墳	古墳～鎌倉	
36	行者山古墳群	榛原町笠岡	前方後円墳、円墳	古墳	
37	池上遺跡	榛原町池上	遺物散布地	弥生後	
38	仮祭池上東遺跡	榛原町池上	遺物散布地	弥生中～後	
39	高山古墳群	榛原町池上	方墳(割竹形木棺)	古墳中	
40	濯頂寺跡	榛原町福西	寺跡、墓地	中世	八咫鳥遺跡群

番号	遺跡名	所在地	遺跡概要	時代	備考
41	福西城跡	榛原町福西	城跡	中世	
42	高塚遺跡	榛原町高塚	遺物散布地(集落跡)	弥生～古墳、中世	
43	栗谷尾尻古墳群	榛原町栗谷	円墳(木棺直葬)	古墳後	
44	栗谷トノヤシキ遺跡群	榛原町栗谷	円墳(木棺直葬)、集落跡、中世墓	古墳後、中世	
45	三角遺跡	榛原町栗谷	遺物散布地(集落跡)	縄文～弥生、中世	
46	石田1号墳	榛原町石田	円墳?(横穴式石室)	古墳後	
47	鳥羽1号墳	榛原町石田	円墳(小型横穴式石室)	古墳後	
48	藤城跡	榛原町大貝・藤	城跡	中世	
49	文弥麻呂墓	榛原町八滝	墳墓	奈良	国史跡
50	大貝ヒジキ山遺跡	榛原町大貝	遺物散布地(集落跡)	縄文後～古墳後、中世	
51	大貝古墳群	榛原町大貝	円墳(横穴式石室)	古墳後	
52	藤古墳群	榛原町藤	円墳(割竹形木棺)	古墳中～後	
53	藤遺跡	榛原町藤	遺物散布地(集落跡)	縄文後～古墳後、中世	
54	下城・馬場遺跡	榛原町藤	遺物散布地(集落跡)	縄文後～古墳後、中世	
55	野山遺跡群 戸石・辰巳前遺跡	榛原町藤	方形石表墓、前方後円墳、円墳、中世墓、寺跡	古墳前～江戸	
56	成場遺跡	榛原町成場	遺物散布地、寺跡?	縄文、平安～室町	本報告
57	低山部赤人墓	榛原町山辺三	墳墓?(鎌倉時代の五輪塔)	鎌倉	
58	山辺城跡群	榛原町山辺三	城跡	中世	
59	藤畑神社前遺跡	榛原町山辺三	遺物散布地	縄文、中世	大半破壊
60	飯赤赤瀬古墳群	榛原町赤瀬	円墳(横穴式石室)	古墳後	
61	樟牧遺跡	榛原町樟牧	遺物散布地	縄文早～後、鎌倉	
62	西谷古墳群	榛原町樟牧	円墳(横穴式石室)	古墳後	
63	樟牧城跡	榛原町樟牧	城跡	中世	
64	高井遺跡	榛原町高井	集落跡	縄文早～後、奈良～中世	
65	赤塚下志明遺跡	榛原町赤塚	住居跡	縄文、中世	
66	赤塚上供遺跡	榛原町赤塚	遺物散布地(集落跡)	縄文、平安～中世	
67	赤塚城跡	榛原町赤塚	城跡	中世	上城
68	膳木野城跡	榛原町膳木野	城跡	中世	
69	八滝長根遺跡	榛原町八滝	遺物散布地	縄文、中世	
70	内牧カラト遺跡	榛原町内牧	遺物散布地、祭祀遺跡?	縄文、奈良	
71	飯赤流谷遺跡	榛原町内牧	(有舌尖器採集)	縄文草	
a	墨坂神社	榛原町萩原			
b	宇太水分神社	榛原町下井尻	式内社		
c	糠下神社	榛原町福地	式内社		
d	丹生神社	榛原町雨間	式内社		
e	八咫鳥神社	榛原町高塚	式内社		
f	郡賀那岐神社	榛原町山路	式内社		
g	藤畑神社	榛原町山辺三			
h	御井神社	榛原町樟牧	式内社		
i	咲坂比売命神社	榛原町荷坂	式内社		

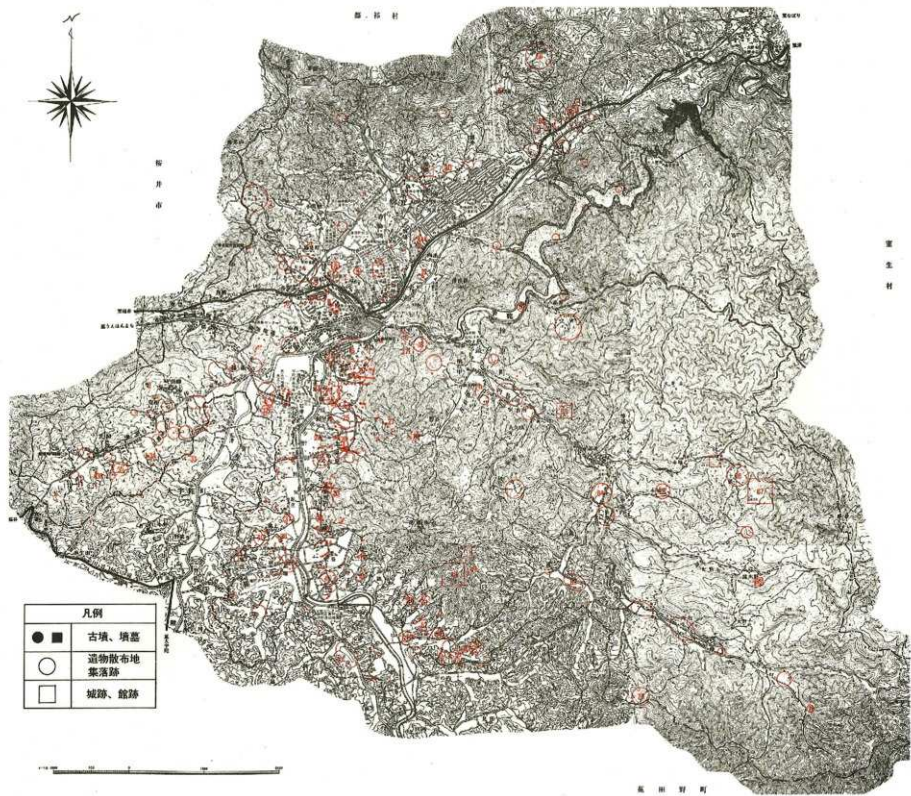


图2 榑原町遺跡分布图

### Ⅲ 下井足カワタ遺跡発掘調査概要

#### 1 調査の契機と経過

##### (1) 調査の契機と経過

本遺跡は、1986年の踏査段階では古墳時代～中世にかけての遺物散布地（榛原町遺跡番号1－100）として確認していたものである。

1990年にこの遺跡を中心として東西方向の道路が新設される計画が明らかとなったため、関係機関等が協議を行ったところ、まず、遺跡の範囲等を明らかにする確認調査を実施することとなった。確認調査は、同年8月8日から8月22日にかけて2箇所のトレンチ調査にて行い、溝・ピット等の遺構、ササカイト・土師器・須恵器等の遺物を検出し、これらがさらに広がっている可能性も考えられた。また、道路予定地に隣接する地区が個人農地として造成される計画もあったため、道路敷地内と農地造成地内とをそれぞれ発掘調査し、遺跡の状況を把握する必要がある。

事業者である榛原町役場からは1991年7月26日付けで改めて、埋蔵文化財発掘調査通知書、個人から1991年8月8日付けで埋蔵文化財発掘調査届出書がそれぞれ提出され、今回の発掘調査となったものである。現地調査（2次調査）は1991年9月4日から1991年9月30日にかけて実施し、その後、整理作業に移り、1992年3月31日に本事業を終えた。

遺跡名は大字名と小字名から「下井足カワタ遺跡」とし、本書には、個人農地造成地内（第1トレンチ）での発掘調査概要を収録している。

調査関係者等は下記のとおりである。

調査主体	榛原町教育委員会（教育長 山尾正弘）
調査担当課	榛原町教育委員会 社会教育課（課長 尾上博美）
調査担当者	榛原町教育委員会 社会教育課 技師 柳澤一宏
調査補助員	井上好美、森塚和彦、山本美恵子、本村充保
調査作業員	池田主子、棚田幸子、中谷喜代子、松村幸代、柳沢雅子
調査指導	奈良県教育委員会 文化財保存課
航空写真撮影	株式会社岡本組、株式会社バスコ
調査協力	荻乃里自治会、榛原町役場同和对策課、福島善一、福島隆雄

1991年（平成3年）

##### (2) 現地調査日誌抄

9月4日（水）	2次調査の開始。器材搬入。掘り下げ開始。	9月20日（金）・9月24日（火）	遺跡実測、平板測量。
9月5日（木）～9月11日（木）	掘り下げ作業、遺構検出作業。	9月25日（水）・9月26日（木）	遺構検出作業、遺構実測、写真撮影。
9月12日（木）・9月18日（木）	掘り下げ作業、遺構実測。	9月30日（月）	航空写真撮影、器材搬出。

## 2 位置と環境

調査地は、榛原の市街地の南辺部にあたり、井足岳から北方にのびる標高約 320～330 m の一尾根先端部に位置する。周辺は様々な開発により以前の景観とは、趣を異にしているものの、北方には榛原の街並、屏風状にならぶ大和富士をはじめとする当地の高峰を望める。

下井足カワタ遺跡と同一尾根上には北から順に式内社の宇太水分神社、下井足城山古墳群、井足城跡などが位置する。また周辺では丹切古墳群、下井足遺跡群、谷遺跡をはじめ、多くの遺跡の発掘調査が行われており、この遺跡は芳野川・宇陀川右岸の遺跡密集地の一角を構成している(図2・3)。

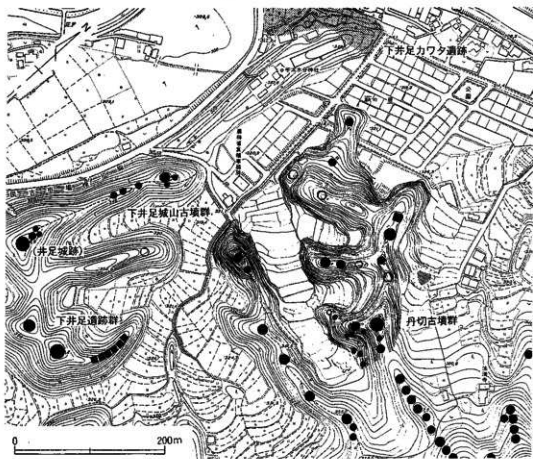


図3 下井足カワタ遺跡位置図

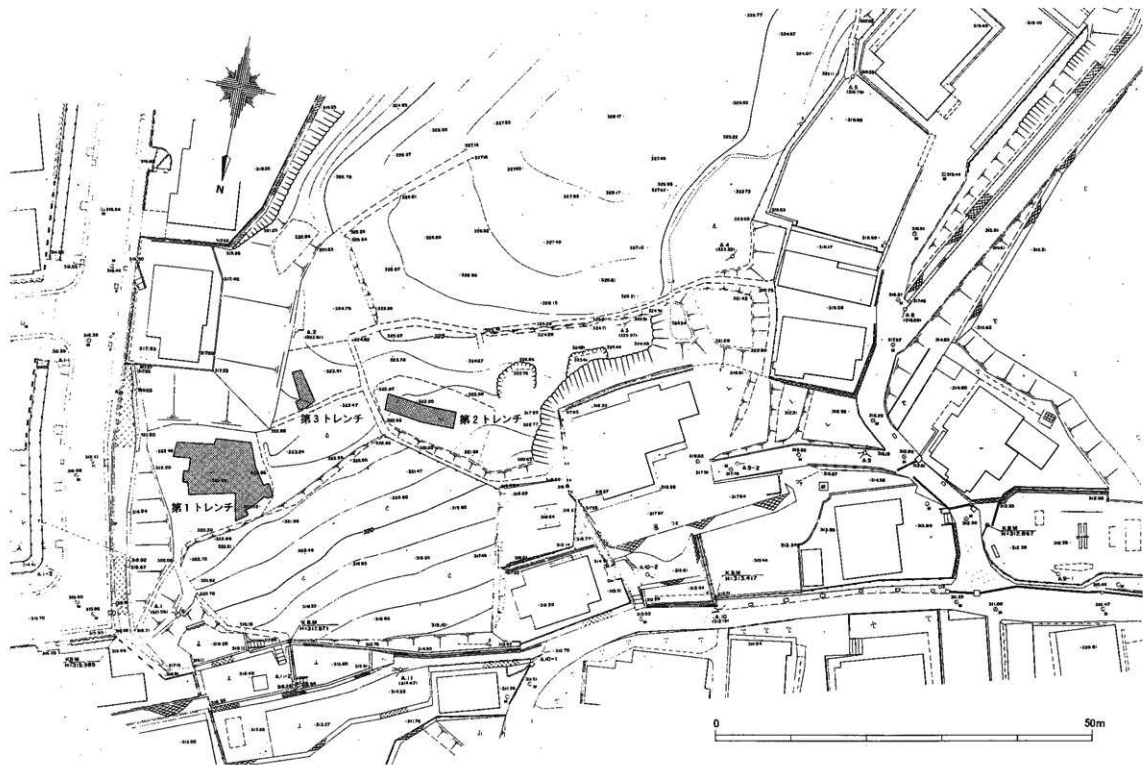


図4 下井足カワタ遺跡調査位置図

### 3 遺跡の調査

#### (1) 調査区と基本土層

1次調査地（第1トレンチ）北側が今回の調査区となっており、前回と同様、1トレンチと呼称している。なお、調査区は、これまでの土地利用等の制約から不規則な調査範囲となっている（図

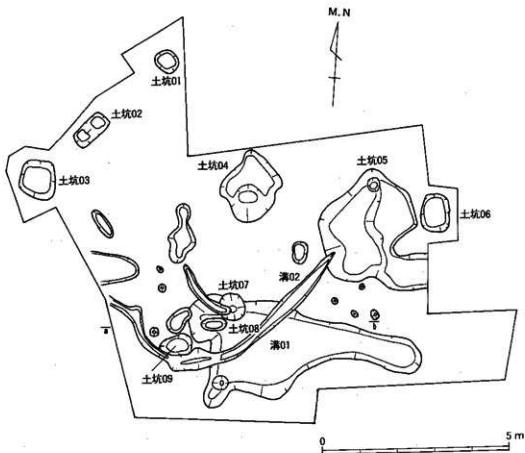


図5 下井足カワタ遺跡第1トレンチ遺構平面図

L = 323m



図6 下井足カワタ遺跡第1トレンチ土層断面図



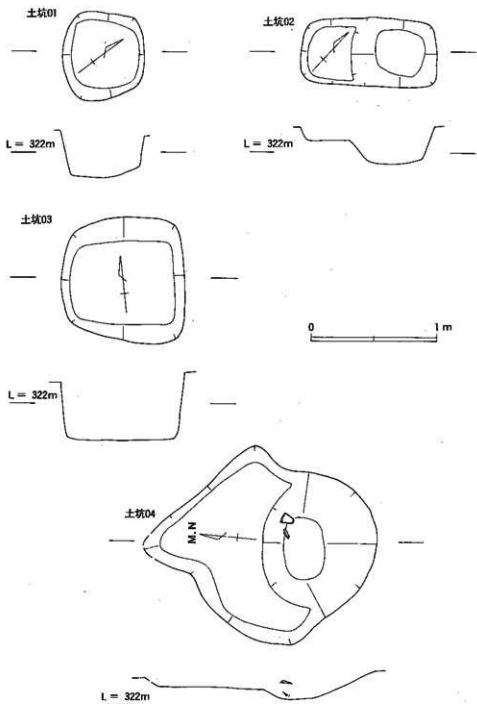


図7 下井足カワタ遺跡土坑01~04実測図

4・5)。淡褐色の耕作土（第1層）を掘り下げると、ほどなく黄褐色粘質土の地山面（遺構面）を検出し、地表からこの面までの深さは約20cmと比較的浅い（図6）。

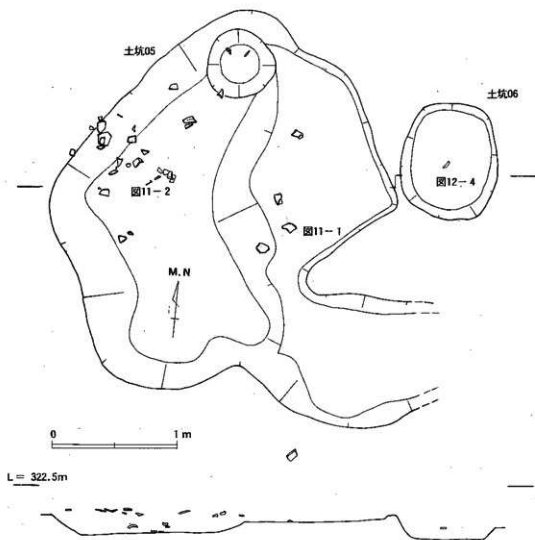


図8 下井足カワタ遺跡土坑05・06実測図

(2) 検出遺構

第1トレンチからは、ほぼ全面にわたって土坑、ピット、溝を検出している(図5)。主要遺構の概要は次のとおりである。

土坑01(図7、図版5)

調査地北に位置する隅丸方形土坑で、一辺70~73cm、深さ87cmをはかる。暗茶灰色の埋土中からは土師器細片が出土しているが、この時期を明らかにできない。

土坑02(図7、図版5)

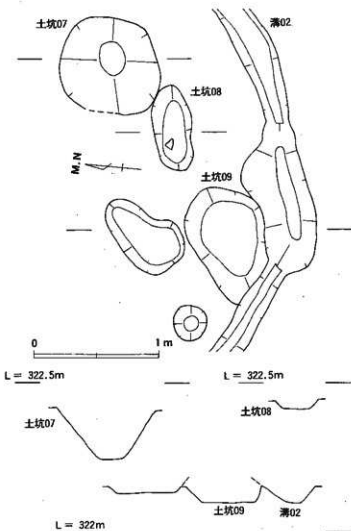


図9 下井足カワタ遺跡土坑07~09実測図

長辺110cm、短辺55cmの長方形土坑である。土坑南半の深さは10cm、土坑北半では深さ30cmをはかる。暗茶色の埋土中からは土師器が出土しているが、細片のため、この時期を明らかにできない。

#### 土坑03 (図7、図版6)

一辺100cm～104cm、深さ52cmの方形土坑である。暗茶灰色の埋土中からは須恵器片、土師器片が出土しているが、具体的な時期を明らかにできない。

#### 土坑04 (図7、図版6)

南北183cm、東西165cmをはかる不整形土坑である。北半の深さは23cm、南半の深さは8cmとなっている。灰黄色粘質土の埋土中からは、土師器瓦片が出土している。詳細は明らかでないが、後述の土坑05と同時期の可能性がある。

#### 土坑05 (図8、図版7～8)

南北310cm、東西280cmをはかる不整形土坑である。西半の深さは

16cm、南半の深さは4cmと西半部が深くなっている。灰黄色粘質土の埋土中からは土師器瓦片、須恵器杯蓋片等が出土している。出土遺物から8世紀前半と考えられる。

#### 土坑06 (図8、図版9)

調査区東端に位置する楕円形土坑で、その規模は長径97cm、南半78cm、深さ17cmである。土坑内(褐色粘質土中)からは土師器片、鉄釘が出土しており、中世のものと考えられる。墳墓の可能性は少ない。

#### 土坑07 (図9、図版9)

溝01を穿って形成されている径80～85cm、深さ42cmの円形土坑である。埋土は淡褐色粘質土である。遺物は検出できず、時期は明らかにできない。

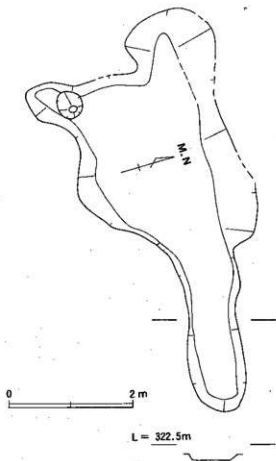


図10 下井足カワタ遺跡溝01実測図

#### 土坑08 (図9、図版10)

溝01上面に位置する長径70cm、短径34cm、深さ4cmの楕円形土坑である。暗黄茶色粘質土の埋土内からは土師器甕片が出土しているが、図化できない。中世期のものと思われる。

#### 土坑09 (図9、図版4)

長径70cm、短径34cm、深さ4cmの楕円形土坑である。灰褐色粘質土の埋土内からは土師器細片が出土しているが、時期は明らかにできない。溝02より古いものである。

#### 溝01 (図10、図版4)

1次調査時にその一部を検出しており、延長650cmとなった。東側での幅は90cm、西側での最大幅260cm、最大深16cmをはかる。暗灰黄色粘質土の埋土中からは、サヌカイト片、須恵器片、土師器片が出土している。土坑05と同時期と考えられる。

#### 溝02 (図5、図版4)

半円状にめぐり、その延長は790cm以上となる。幅12~32cm、深さ4cm前後をはかる。灰黄色粘質土の埋土中からは、サヌカイト片、土師器細片が出土している。具体的な時期を明らかにできないものの、中世期のものと考えられる。

### (3) 出土遺物

#### 須恵器 (図11)

土坑05内から出土した須恵器片3点を図化している。(1)は復元口径16.4cm、現存高1.8cmをはかる。天井部が平らに近く、擬宝珠様つまみが付されていたと考えられる。口縁端部は下方へ短く屈曲し、先端はやや丸い。口縁部内面にかえりは認められない。焼成は悪く、軟質のため、器壁は摩滅が著しい。灰白色を呈する。(2)、(3)とも口縁部内面にかえりをもつが、その先端は口縁部以下には突出しない。(2)は復元口径15.4cm、復元かえり径12.6cm、現存高1.6cmをはかり、色調は明オリブ灰色、胎土は精良、焼成は堅緻となっている。(3)は復元口径15.4cm、復元かえり径13.2cm、現存高1.2cmをはかる。色調・胎土・焼成は(2)と同様である。(1)は土坑東方、(2)は土坑東端、(3)は土坑西方下層からの出土である。(1)は8世紀前半、(2)、(3)は7世紀後半に比定できる。

#### 鉄釘 (図12、図版10)

土坑06内から出土したものである。頭部を欠損するが、残存長約6cmをはかる角釘である。

#### サヌカイト片 (図13、図版10)

耕作土内から6点のサヌカイト片が出土しており、うち、3点の剝片を図示した。

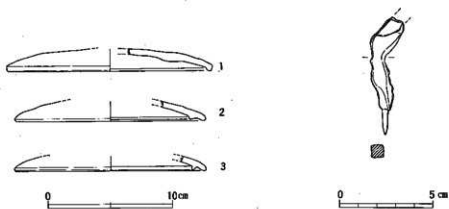


図11 下井足カワタ遺跡土坑05出土須恵器実測図 図12 下井足カワタ遺跡土坑06出土鉄釘実測図

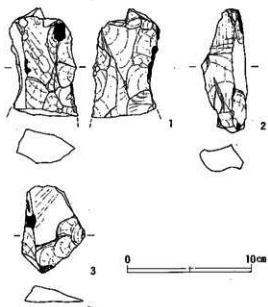


図13 下井足カワタ遺跡第1トレンチ出土サヌカイト実測図

#### 4 ま と め

後世の耕作等により遺構の大半が削平され、遺構の検出状況は、良好とはいえない。3箇所の調査区のうち、第1トレンチから比較的多くの遺構・遺物を検出することができた。このうち土坑05内からは、7世紀後半～8世紀前半に比定できる須恵器片、土師器片などがややまとまって出土している。

耕作土中よりサスカイト片、須恵器、土師器などが出土しており、下井足カワタ遺跡は弥生時代、古墳時代、奈良時代、中世の居住域であった可能性が高い。

#### 5 抄 録

遺 跡 名	下井足カワタ遺跡
調 査 地	奈良県宇陀郡榛原町大字下井足 155 番地
遺 跡 立 地	標高約 320～330 m の尾根上
遺 跡 規 模	南北約 50m、東西：70m、面積：約 3500m <sup>2</sup>
時 代 ・ 種 別	弥生時代～中世の遺物散布地
調 査 名	下井足カワタ遺跡発掘調査事業
調 査 主 体	榛原町教育委員会（教育長 山尾正弘、調査担当者 柳澤一宏）
調 査 原 因	道路新設工事（事業者：榛原町）
現地調査期間	1991年9月4日～1991年9月30日（2次調査）
調 査 面 積	約 110.9 m <sup>2</sup> （1990年発掘調査含む）
検 出 遺 構	土坑、溝、ピット
検 出 遺 物	サスカイト、須恵器、土師器、鉄釘 整理箱 1 箱
資料等の保管	榛原町教育委員会（文化財整理室）

参考文献 石野博信他『奈良県遺跡地図』第2分冊改訂 奈良県教育委員会 1984

柳澤一宏『榛原町遺跡分布調査概報』（榛原町文化財調査概要2）榛原町教育委員会 1987

『平城宮発掘調査報告』Ⅵ 奈良国立文化財研究所 1976

## IV 戒場遺跡発掘調査概要

### 1 調査の契機と経過

#### (1) 調査の契機と経過

本遺跡は、榛原町遺跡番号3-1・2、奈良県遺跡番号103-9・10として登録している2箇所の遺物散布地からなり、これまでに縄文時代と中世の遺物が採集されている。

この遺物散布地を含む水田地帯約2.2haにおいて農地造成工事が実施されることとなったため、1991年5月16日付けで遺跡有無確認踏査願が提出され、計画地には中世土器が散布することが再確認された。その後、1991年8月27日付けで埋蔵文化財発掘通知書が提出され、関係機関等が調査の実施方法等について協議を行った。この結果、発掘調査は、榛原町教育委員会が担当することとなり、その調査の一部は国庫・県費補助事業としている。そして、重要な遺構等が発見されれば、その保存等について改めてその取り扱いを協議することとなった。

現地調査は1991年10月23日に着手し、同年12月6日に終了した。なお、遺跡名は2箇所の遺物散布地を総称して、大字名から「戒場<sup>かいば</sup>遺跡」とした。

調査関係者等は次のとおりである。

調査主体	榛原町教育委員会（教育長 山尾正弘）
調査担当課	榛原町教育委員会 社会教育課（課長 尾上博美）
調査担当者	榛原町教育委員会 社会教育課 技師 柳澤一宏
調査補助員	井上好美、森塚和彦、本村充保、山本美恵子
調査作業員	井上富美恵、井上豊子、奥田幸恵、戸阪アサエ、 戸坂宏子、清水千鶴子
調査指導	奈良県教育委員会
航空写真撮影	株式会社岡本組、株式会社パスコ
調査協力	戒場自治会、榛原町役場産業課、戸阪忠夫

#### (2) 現地調査日誌抄

1991年（平成3年）	設定、精査。
10月23日（水）	10月29日（火） 第3トレンチ精査、ビット掘り下げ。第2・3・4トレンチ平板測量。
午後、調査前の写真撮影。	
10月24日（木）	10月31日（木） 第1～4トレンチ土層断面図作成。第1・2トレンチ写真撮影。第3トレンチ東方の一部を拡張、ビットを確認。
第1・2・3トレンチ設定。	
10月25日（金）	
午後、器材搬入。	
10月28日（月）	
第3トレンチ掘り下げ、精査。第4トレンチ	



- 11月5日(火)  
第5・6トレンチ設定。第3トレンチ東方拡張。
- 11月6日(水)  
第3トレンチ拡張区精査、地区杭設定、ピット等の遺構を確認。
- 11月7日(木)・11月11日(月)  
第3トレンチ拡張部精査、遺構掘り下げ。
- 11月13日(木)  
航空写真撮影。第3トレンチ拡張部SX-01掘り下げ。
- 11月15日(木)  
第3トレンチ拡張部遺構実測、SX-01掘り下げ。
- 11月16日(土)  
午前、第5・6トレンチ土層断面図作成、平板測量。

- 11月18日(月)  
午前、第3トレンチ拡張部遺構実測。
- 11月19日(火)  
第3トレンチ拡張部SX-01掘り下げ。
- 11月20日(水)  
寒波。第3トレンチ拡張部SX-01掘り下げ、瓦器出土。
- 11月25日(月)  
第3トレンチ拡張部平板測量。
- 11月28日(木)  
午前、SD-03実測。
- 12月2日(火)  
午前、遺構写真撮影。図面補筆。
- 12月3日(水)  
午前、器材撤収。
- 12月6日(金)  
周辺踏査。写真撮影。

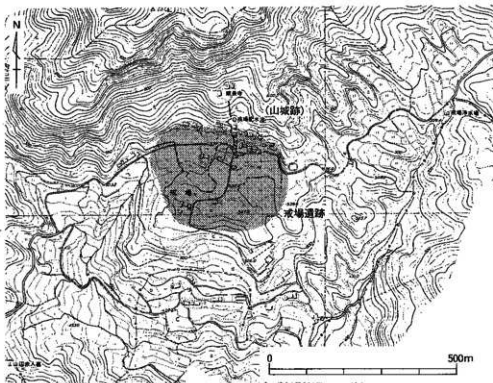


図14 戒場遺跡位置図

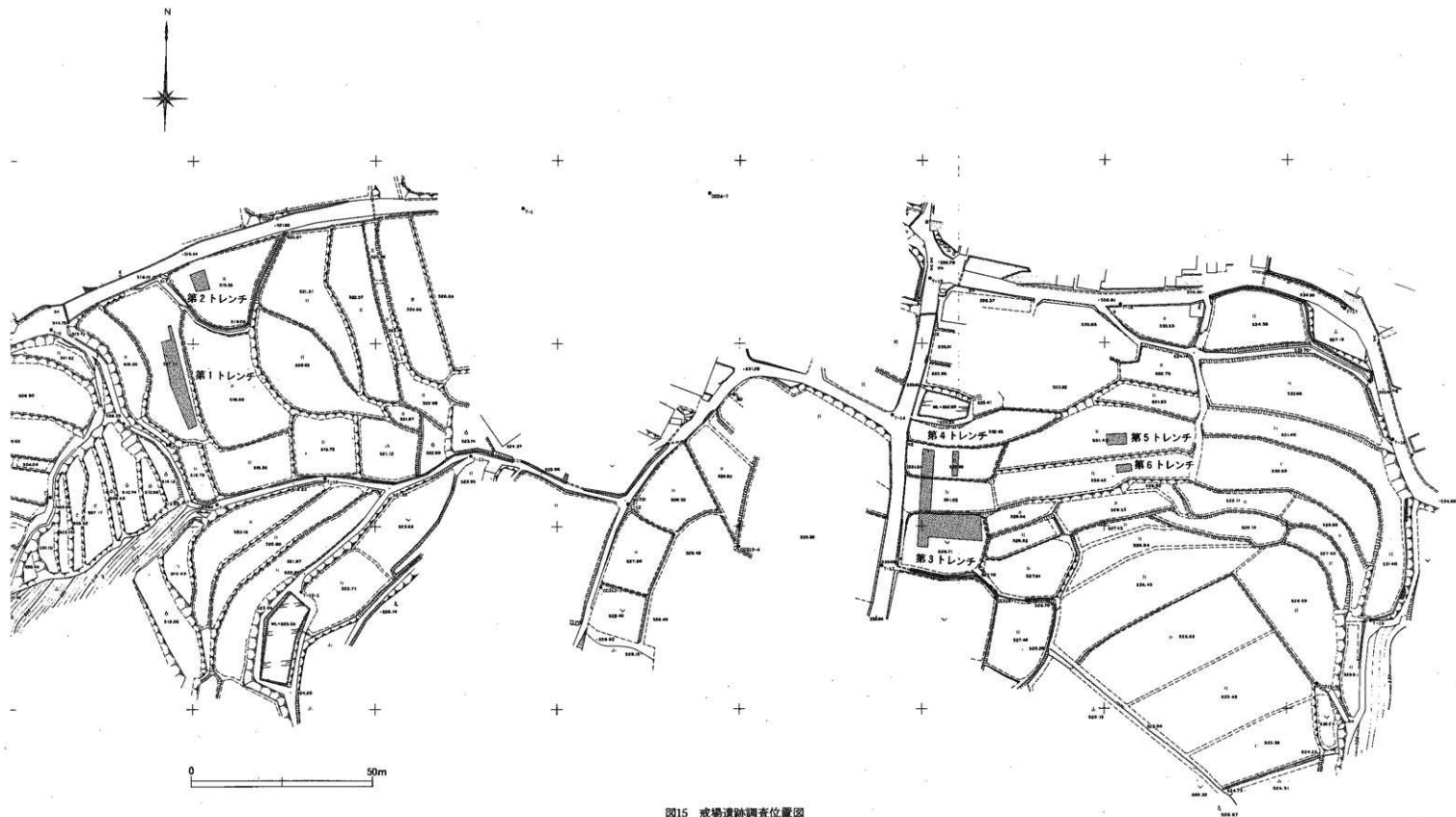


図15 戒備遺跡調査位置図

## 2 位置と環境

戒場遺跡は大和高原と口字陀地方とをわける額井岳山系の中腹、戒場集落内に位置する。戒場集落は、標高約500～550mの南に緩やかに傾斜する平坦地に広がり、この集落規模は南北約300m、東西約350mとなっている。この南に傾斜する平坦地の中央付近が戒場遺跡の範囲と推定しており、「ダイモン」、「カネノカイト」、「ゴマヤマ」、「ドウバタ」、「ドウサカ」などといった小字名がある。

集落の北方の山腹には、平安時代後半の創建と伝える戒長寺<sup>かいちやうじ</sup>がある。また、今回の調査に伴う周辺踏査によって、戒長寺の東側で中世の築造と推定される小規模な山城跡を確認している。戒場遺跡の南西約800mの尾根上には、山部赤人の墓と伝えるところがあり、そこには鎌倉時代前期と推定される五輪塔が建立されている(図2、14)。

## 3 遺跡の調査

### (1) 調査区と基本土層

遺跡の範囲を確認するため、工事予定地内に6箇所のトレンチを設定した(図15～17)。

#### 第1トレンチ(図版14)

基本土層は耕作土(1層)、灰色粘質土(2層)、榛原石の基盤層(地山・3層)となっており、地表から地山面までの深さは20cm～45cmを測る。中世土器片が若干出土したが、遺構は検出してない。このトレンチの南北両側は埋没した谷地形となっている。

#### 第2トレンチ(図版14)

基本土層は耕作土(1層)、灰色粘質土(2層)、暗灰色粘土(3層)、黒灰色粘土(4層)、暗灰色砂礫(5層)となっている。地表から掘削面までの深さは約95cmである。サヌカイト片、中世土器片が出土している。遺構は認められず、埋没谷となっている。

#### 第3トレンチ(図版15～19)

3面の水田を南北に横断する格好でトレンチを設定したところ最南の水田で遺構・遺物を検出したため、東方に調査範囲を拡張している。なお、第3トレンチ拡張部の地区割は図21のとおりである。

基本土層は、地区によって若干の相違が見うけられるものの、耕作土(1層)、暗青灰色粘質土(2層)、茶灰色粘質土(3層)、暗茶灰色粘質土(4層)、地山(5層)となっている。3時期の遺構を確認でき、3層上面、4層上面、地山面がそれぞれの遺構面となっている。

#### 第4トレンチ(図版15)

基本土層は耕作土(1層)、地山(2層)となっており、明確な遺構は認められない。

第5トレンチ (図版20)

基本土層は耕作土 (1層)、灰色粘質土 (2層)、淡褐色粘質土 (3層)、褐色粘質土 (4層)、黒灰色粘質土・黄灰色土 (5層)、地山 (6層) となっている。地表から地山面までの深さは西側で55cm、東側で75cmをはかり、西から東へと緩やかに傾斜する。明確な遺構は認められない。

第6トレンチ (図版20)

基本土層は耕作土 (1層)、灰色粘質土 (2層)、灰茶色粘質土・暗灰色粘土 (3層)、褐色粘質土・黒灰色粘質土 (4層)、地山 (6層) となっている。地表から地山面までは約70~80cmをはかる。明確な遺構は認められない。

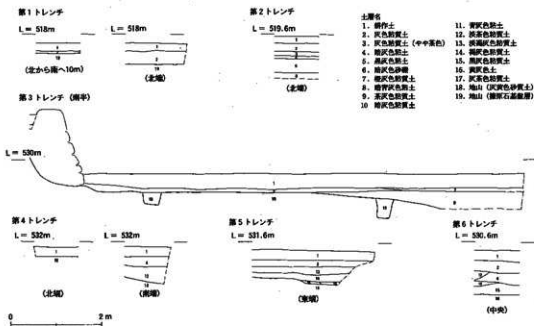


図16 戒場遺跡土層断面図

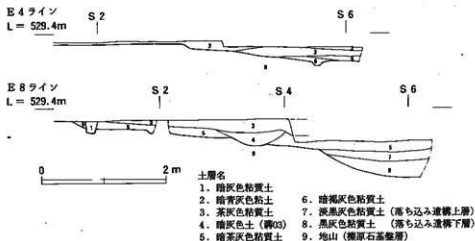


図17 戒場遺跡第3トレンチ拡張部土層断面図

(2) 検出遺構

先述のとおり、第3トレンチ東方の拡張部分で3時期の遺構を検出している。以下、主要遺構の概要を述べる。

下層遺構

落ち込み遺構(図18、図版16・19)

調査区の東南隅で検出しているが、その明確な全容は明らかでない。不整半円形を呈するのであろうか。南傾する地山面を穿って形成されており、埋土は淡黒灰色粘質土(上層)、黒灰色粘質土(下層)からなる。埋土中からは、瓦器、土師器が出土している。

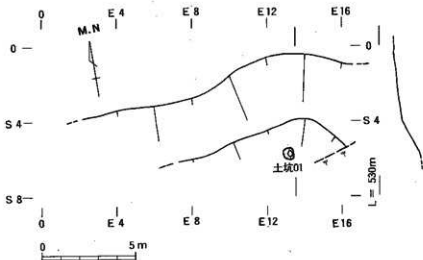


図18 戒場遺跡落ち込み遺構実測図

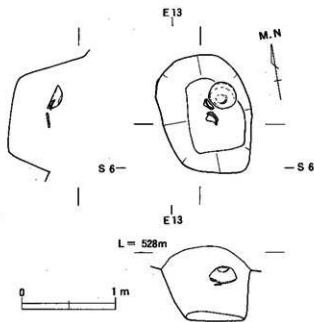


図19 戒場遺跡土坑01実測図

土坑01 (図19、図版19)

落ち込み遺構底の地山を穿って形成された楕円形土坑である。土坑上半部からは瓦器碗が逆位で出土している(出土遺物の項参照)。土坑規模は南北径67cm、東西径47cm、最大深40cmをはかる。

中層遺構

溝03 (図20、図版18)

落ち込み遺構01を埋める暗茶灰色粘質土を穿って東西方向に形成されている。調査中の不注意によって東西両端の状況を明らかにできない。延長440cm以上、幅58~85cm、最大深38cmをはかる。溝埋土の暗灰色土中からは瓦器、土師器の細片が出土している。

上層遺構

中層遺構を埋める茶灰色粘質土上面ないし地山面に土坑、ピット、建物遺構等が認められる。

掘立柱建物遺構 (図22、図版15~18)

東西2間、南北1間(東西約440cm、南北約280cm)をはかり、柱穴は直径40~80cm、深さ54~80cmをはかる。埋土は暗灰色粘質土、茶灰色粘質土である。なお、この建物はさらに北へのびる可

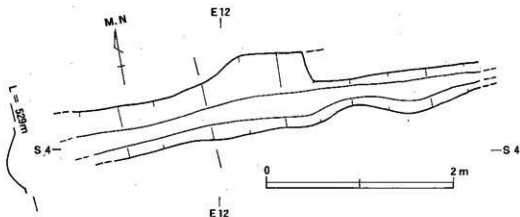


図20 戒場遺跡溝03実測図

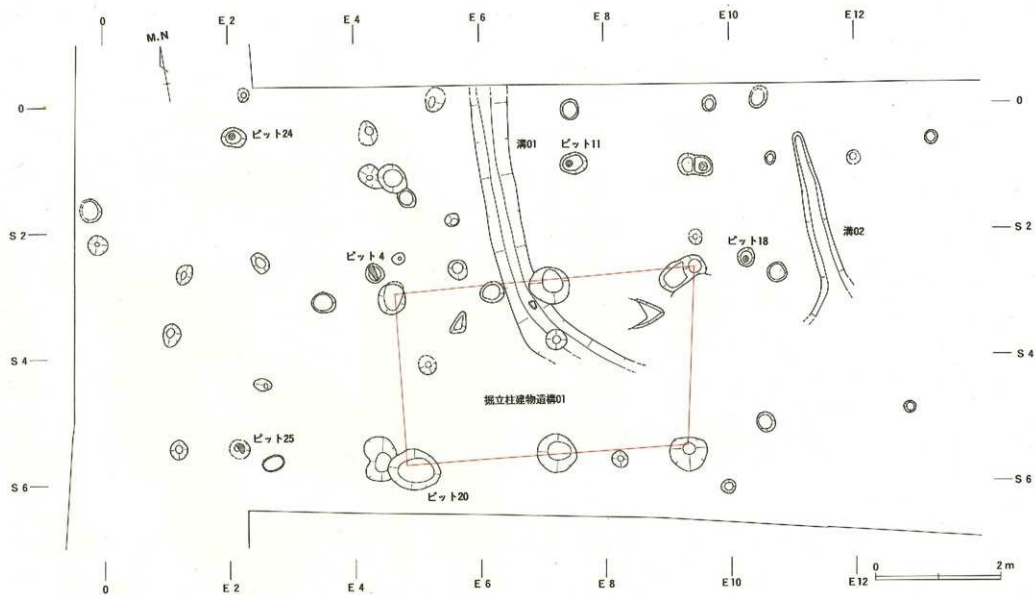


図21 第3トレンチ拡張部上層遺構平面図

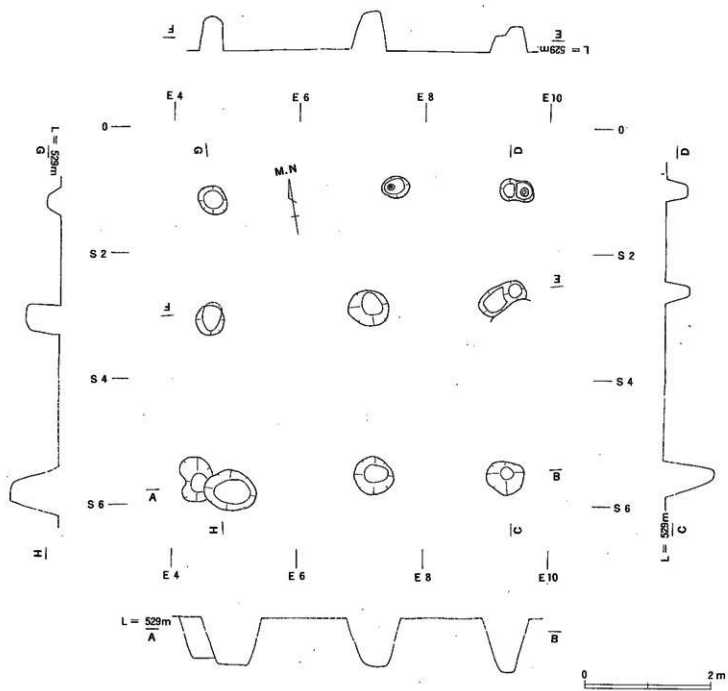


圖22 成場遺跡圓柱建物遺構01實測圖



能性もあり、この場合、東西2  
間、南北2間（東西約440cm、  
南北約440cm）となる。

溝01（図23、写真2、図版18）

SB-01を南北に横断するかの  
ように形成されており、南端  
は東方に屈曲する。規模は延長  
480cm以上、幅56~72cm、深さ  
約18cmをはかる。埋土は2層に  
大別でき、上層が暗灰色粘質土、  
下層が暗青灰色砂となっている。  
この埋土中からは須恵器、瓦器、  
磁器が出土している。

溝02（図21）

規模は延長300cm以上、幅18  
~42cm、最大深10cmをはかる。  
炭細片を含む茶灰色粘質土の埋  
土中からは瓦器、土師器、瓦質  
土器の各破片が出土している。

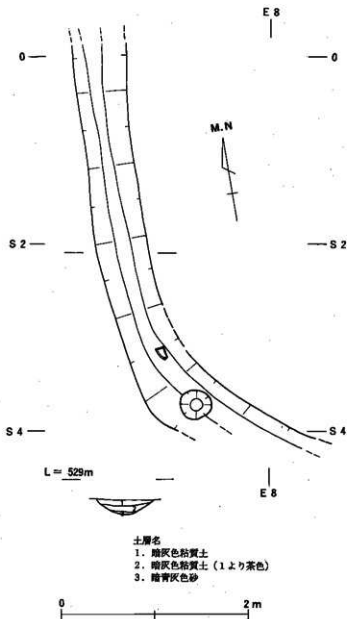


図23 戒場遺跡溝01実測図



写真2 溝01土層断面

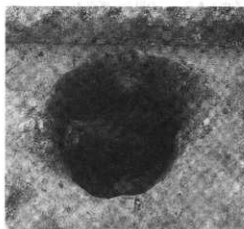


写真3 ビット4



写真4 ビット11

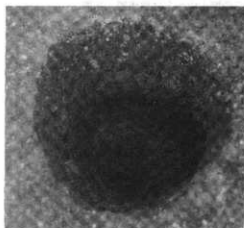


写真5 ビット18

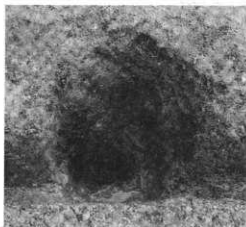


写真6 ビット24

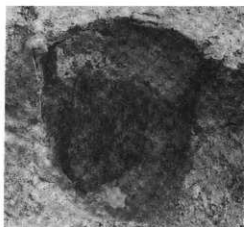


写真7 ビット25

(3) 出土遺物(図24～26、表4)

今回の発掘調査によって、須恵器(甕)、瓦器(碗・皿)、土師器(皿・土釜)、青磁(碗)、サヌカイトを検出することができ、その量は整理箱3箱を数える。なかでも第3トレンチの拡張部分からの出土量は比較的多い。ここには、第3トレンチから出土した29点の土器を图示している。

包含層出土土器(図24-1～3)

(1)は茶灰色粘質土から出土の瓦器碗、(2)は土師器皿で、この包含層上面に上層遺構が構築される。底部の破片ではあるが、内面に6輪の連結輪状暗文が認められ、高台はやや厚みのある逆三角形を呈する。(3)は暗茶灰色粘質土から出土した瓦器碗底部片である。外傾状の細長い高台からなり、底部内面には連結輪状暗文が認められる。(1)、(3)は川越編年の第II段階B型式、松本編年の土坑-01下層期(新)～南SE-21下層期に比定でき、12世紀前葉～中葉の年代が考えられる。

上層遺構出土土器(図24-4～6)

(4)はピット20内(獨立柱建物遺構01)から出土した青磁碗の底部片で、復元高台径5.4cmをはかる。(5)はピット4上面から出土した瓦質土器の摺鉢片である。復元底部径10.6cmをはかり、内面には5～6条の短い摺目が放射状に施されている。(6)は溝02から出土した瓦質土器鉢である。復元底部径15.8cm、器高4.3cmをはかり、外面には8弁の花紋スタンプを等間隔にめぐらす。

落ち込み遺構出土土器(図25)

(1)～(4)が上層、(5)～(8)が下層からの出土である。

(1)～(8)は瓦器碗底部、(9)～(11)は瓦器碗体部の破片である。底部内面には連結輪状暗文、体部内面には横方向の暗文(ヘラミガキ調整)を施し、口縁端部内面に沈線をめぐらす。(10)、(11)は口縁部の内面に明瞭な沈線がめぐる。これらは川越編年の第II段階B型式、松本編年の土坑-01下層期(新)～南SE-21下層期に比定でき、12世紀前葉～中葉の年代が考えられる。

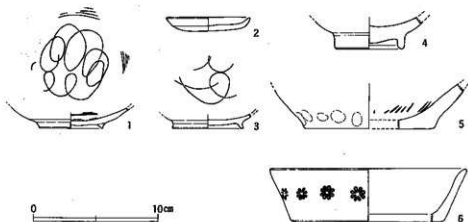


図24 戒場遺跡第3トレンチ包含層等出土土器実測図

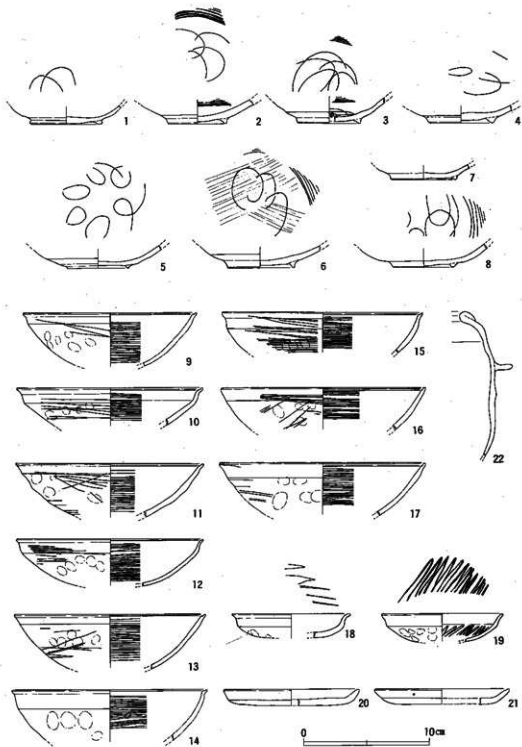


図25 戒場遺跡落ち込み遺構出土土器実測図

例、例は土師器皿片で、復元口径10.4～10.6cmをはかる。例は土師器土釜である。破片のため、口径等は復元できない。

#### 土坑01出土土器 (図26)

土坑01上層からほぼ完形で出土した瓦器碗である。底部内面には、平行線状(ジグザグ状)暗文、体部内面には丁寧な横方向のヘラミガキ調整を施す。体部外面にはやや粗い横方向・斜め方向の断続的なヘラミガキ調整が認められる。口縁部内面には明瞭な沈線をめぐらす。高台は肥厚した逆三角形となっている。口径15.2cm、器高6.2cmをはかる。川越編年の第I段階D型式、松本編年の井戸-03青粘期に比定でき、12世紀初頭の年代が考えられる。

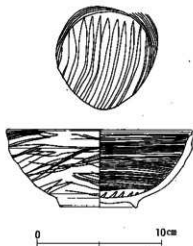


図26 戒場遺跡土坑01出土土器実測図

注1) 川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会編 1983

注2) 松本洋明他『十六面・薬王寺遺跡』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第54冊) 奈良県立橿原考古学研究所 1988

## 4 ま と め

戒長寺は先述のとおり、平安時代後期の創建と伝えられ、広い寺域をもっていたと考えられている。戒長寺南方の戒場集落内には「ダイモン」、「カネノカイト」、「ゴマヤマ」、「ドウバタ」、「ドウサカ」などの寺院に関係すると思われる小字名があり、戒長寺旧境内が戒場遺跡と合致すると考えてきた。

戒長寺から真っすぐ南方へのびる町道の延長上には、「ダイモン」があり、町道は、かつての参道であった可能性がある。町道東側の第3トレンチからは12世紀代の建物跡等の遺構を確認し、上層遺構は12世紀後葉すぎ、中層遺構は12世紀中葉すぎ、下層遺構は12世紀初頭の年代と考えられる。これらは創建頃の戒長寺に関連する遺構である可能性が高く、建物遺構は参道脇の小坊であろうか。

戒場遺跡の中心は町道付近から西方の住宅地のあたりと推定できるが、ほとんどが事業範囲外となっているため、今回は発掘調査を実施していない。このため、今後の発掘調査等によって遺跡の範囲、遺構の性格等をさらに明らかにしていかなければならない。

表4 戒場遺跡出土土器観察表

挿図番号	種類・器形	法量 (cm)	形態の特徴
24-1	瓦器・碗	高台径 残存高 5.0 1.5	やや厚みのある逆三角形の張り付け高台である。
24-2	土師器・皿	口径 器径高 6.8 1.1	口縁部はやや内湾状に丸みをおびて立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。底部は丸みもち、窪みを認められない。
24-3	瓦器・碗	復元高台径 残存高 5.6 1.2	外傾状に張り付けた細長い高台である。
24-4	青磁・碗	復元高台径 残存高 5.4 2.5	細長く下方にのびる高台である。
24-5	瓦質土器・鉢	復元口径 復元底径 残存高 10.6 3.6	平底を呈する。底部内面端には短い5~6条の摺目を施し、10単位に復元できる。
24-6	瓦質土器・鉢	復元口径 復元底径 器径高 15.8 11.8 4.3	体部は直線的に外上方にのびる。底部の大半は残存しないが、平底と思われる。体部外面の中ほどには8弁の花紋スタンプを等間隔に巡らす。
25-1	瓦器・碗	復元高台径 残存高 5.6 1.5	やや外方にひらく逆三角形の張り付け高台である。
25-2	瓦器・碗	高台径 残存高 4.6 1.9	逆三角形の張り付け高台である。
25-3	瓦器・碗	復元高台径 残存高 5.0 2.1	やや外方にひらく逆三角形の張り付け高台である。
25-4	瓦器・碗	復元高台径 残存高 5.0 1.4	やや肥厚する逆三角形の張り付け高台である。
25-5	瓦器・碗	高台径 残存高 4.8 1.8	小さな逆三角形の張り付け高台である。
25-6	瓦器・碗	高台径 残存高 5.4 1.8	細長い逆三角形の張り付け高台は、やや外傾する。
25-7	瓦器・碗	高台径 残存高 5.2 1.2	低い逆三角形の張り付け高台である。
25-8	瓦器・碗	復元高台径 残存高 5.4 1.9	やや外方にのびる肥厚した逆三角形の張り付け高台である。
25-9	瓦器・碗	復元口径 残存高 13.8 4.3	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部内面に沈線を施す。

技 法 の 特 徴	色 調 ・ 胎 土 ・ 焼 成	出 土 地 点
底部内面には6輪の連結輪状暗文、体部内面には横方向の暗文（ヘラミガキ調整）が認められる。	色調 灰色 胎土 精良 焼成 良好	茶灰色粘質土
口縁部内外面は横ナデ、その他は内外面ともナデを施す。	色調 にぶい褐色・褐灰色 胎土 精良 焼成 良好	茶灰色粘質土
内面はナデのもの、底部は連結輪状暗文、体部は横方向の暗文（ヘラミガキ調整）を施す。	色調 灰色 胎土 精良 焼成 良好	暗茶灰色粘質土
	色調 明緑灰色 胎土 精良 焼成 堅緻	ビット20 （掘立柱建物遺構01）
内外面とも摩滅しているが、内面はナデ、外面は指圧痕が認められる。	色調 内面：灰色 胎土 外面：灰白色 焼成 精良 良好	ビット4上面
内外面とも横ナデを施す。	色調 内面：灰白色 胎土 外面：黒褐色 焼成 精良 軟質	溝02
底部内面は、横ナデののち連結輪状暗文を施す。	色調 灰色 胎土 精良 焼成 良好	落ち込み遺構 上層
底部内面は、横ナデののち連結輪状を施す。体部内面には横方向の暗文（ヘラミガキ調整）を施す。	色調 灰色 胎土 精良 焼成 良好	落ち込み遺構 上層
底部内面は、横ナデののち連結輪状暗文を施す。	色調 灰色 胎土 精良 焼成 良好	落ち込み遺構 上層
底部内面は、横ナデののち連結輪状暗文を施す。	色調 内：黒色、 胎土 外：灰白色 焼成 精良 良好	落ち込み遺構 上層
底部内面は、横ナデののち6輪の連結輪状暗文を施す。	色調 灰色 胎土 精良 焼成 良好	落ち込み遺構 下層
底部内面は、横ナデののち連結輪状暗文を施す。体部内面には横方向の暗文（ヘラミガキ調整）を施す。	色調 灰色 胎土 精良 焼成 良好	落ち込み遺構 下層
内外面とも摩滅が著しい。	色調 灰白色 胎土 精良 焼成 軟質	落ち込み遺構 下層
底部内面は、横ナデののち連結輪状暗文を施す。体部内面には横方向の暗文（ヘラミガキ調整）を施す。	色調 灰色 胎土 精良 焼成 良好	落ち込み遺構 下層
体部内面には、横方向の暗文（ヘラミガキ調整）を密に施す。体部外面には、粗い横方向の暗文（ヘラミガキ調整）を施す。	色調 灰色 胎土 精良 焼成 良好	落ち込み遺構 下層

種目番号	模倣・器形	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴
25-10	瓦器・碗	復元口径 14.8 残存高 3.3	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部は外反する。口縁端部内面には、沈線を施す。
25-11	瓦器・碗	復元口径 14.8 残存高 4.2	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部内面に沈線を施す。
25-12	瓦器・碗	復元口径 14.8 残存高 3.7	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部は外反する。口縁端部内面には、沈線を施す。
25-13	瓦器・碗	復元口径 15.2 残存高 4.3	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部はやや外反する。口縁端部内面には、沈線を施す。
25-14	瓦器・碗	復元口径 15.6 残存高 4.0	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部は外反する。口縁端部内面には、沈線を施す。
25-15	瓦器・碗	復元口径 16.0 残存高 3.2	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部はやや外反する。口縁端部内面には、沈線を施す。
25-16	瓦器・碗	復元口径 16.2 残存高 3.3	体部はやや内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。口縁部内面に沈線を施す。
25-17	瓦器・碗	復元口径 16.4 残存高 4.1	体部はやや内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。口縁部内面に沈線を施す。
25-18	瓦器・皿	復元口径 9.4 残存高 1.9	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部は丸くおさめる。
25-19	瓦器・皿	復元口径 9.8 残存高 2.2	体部はやや内湾気味に外上方に立ち上がる。口縁部はやや外反し、口縁端部は丸くおさめる。
25-20	土師器・皿	復元口径 10.4 器 高 1.3	口縁部は直線気味に外上方に立ち上がり、口縁端部は尖り気味におさめる。
25-21	土師器・皿	復元口径 10.6 器 高 1.2	体部はやや内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部は丸い。
25-22	土師器・土釜	復元口径 一 残存高 11.5	口縁部は内傾し、上方に立ち上がる。口縁端部は折り返され、丸く肥厚する。胴は水平に外方へのびる。
26	瓦器・碗	口径 15.2 器台高 6.0 器高 6.2	口縁部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部は丸い。この内面には、明瞭な沈線を施す。高台は肥厚した逆三角形の張り付け高台である。



技 法 の 特 徴	色 調 ・ 胎 土 ・ 焼 成	出 土 地 点
体部内面には、やや粗い横方向の暗文（ヘラミガキ調整）、体部外面には粗い横方向の暗文（ヘラミガキ調整）を施す。	色調 灰色 胎土 精良 焼成 良好	落ち込み遺構 下層
体部内面には、横方向の暗文（ヘラミガキ調整）を密に施す。体部外面には、粗い横方向・斜め方向の暗文（ヘラミガキ調整）を施す。	色調 灰色 胎土 精良 焼成 良好	落ち込み遺構 下層
体部内面には、やや粗い横方向の暗文（ヘラミガキ調整）、体部外面には粗い横方向の暗文（ヘラミガキ調整）を施す。	色調 灰色 胎土 精良 焼成 良好	落ち込み遺構 下層
体部内面には、横方向の暗文（ヘラミガキ調整）、体部外面には粗い横方向の暗文（ヘラミガキ調整）を施す。	色調 灰色 胎土 精良 焼成 良好	落ち込み遺構 下層
体部内面には、横方向の暗文（ヘラミガキ調整）、体部外面にはやや粗い横方向の暗文（ヘラミガキ調整）を施す。	色調 灰色 胎土 精良 焼成 良好	落ち込み遺構 下層
体部内面には、横方向のやや粗い暗文（ヘラミガキ調整）、体部外面にはやや粗い横方向・斜め方向の暗文（ヘラミガキ調整）を施す。	色調 灰色 胎土 精良 焼成 良好	落ち込み遺構 下層
体部内面には、横方向のやや粗い暗文（ヘラミガキ調整）、体部外面にはやや粗い横方向の暗文（ヘラミガキ調整）を施す。	色調 灰色 胎土 精良 焼成 良好	落ち込み遺構 下層
底部内面に粗い平行線状暗文を施す。	色調 灰色 胎土 精良 焼成 良好	落ち込み遺構 下層
底部内面に太い平行線状暗文を施す。	色調 灰色 胎土 精良 焼成 良好	落ち込み遺構 下層
体部は横ナデ、内面中央はナデを施す。	色調 にぶい橙色 胎土 精良 焼成 良好	落ち込み遺構 下層
体部は横ナデ、内面中央はナデを施す。	色調 橙色 胎土 精良 焼成 良好	落ち込み遺構 下層
口縁部外面は横ナデ、体部内面には横ナデ・刷毛目が認められる。	色調 淡黄色 胎土 精良 焼成 良好	落ち込み遺構 下層
底部内面には平行線状暗文、体部内面には全面に丁寧な横方向の暗文（ヘラミガキ調整）を施す。体部外面にはやや粗い横方向・斜め方向の断続的な暗文（ヘラミガキ調整）が認められる。	色調 暗灰色 胎土 精良 焼成 良好 備考 ほば完形	土坑01

## 5 抄 録

遺 跡 名	戒場遺跡
調 査 地	奈良県宇陀郡榛原町大字戒場268-1、269-1、371、372-1、372-2、435-1、435-2 番地
遺 跡 立 地	標高約 520～550 m の山塊南斜面
遺 跡 規 模	南北約 250 m、東西約 300 m、面積：約 75000 m <sup>2</sup>
時 代・種 別	縄文時代・平安時代～中世の遺物散布地 平安時代の建物跡等（寺院跡？）
調 査 名	戒場遺跡遺跡発掘調査事業
調 査 主 体	榛原町教育委員会（教育長 山尾正弘、調査担当者 柳澤一宏）
調 査 原 因	農地造成工事（事業者：榛原町役場産業課）
現 地 調 査 期 間	1991年10月23日～1991年12月6日
調 査 面 積	約 360 m <sup>2</sup>
検 出 遺 構	掘立柱建物遺構、土坑、ピット、溝、落ち込み遺構
検 出 遺 物	須恵器（甕）、瓦器（碗、皿）、土師器（皿、土釜）、青磁（碗）、磁器（甕）、 サマサイト 整理箱 3箱
資 料 等 の 保 管	榛原町教育委員会（文化財整理室）

- 参考文献 石野博信『奈良県遺跡地図』第2分冊改訂 奈良県教育委員会 1984  
 柳澤一宏『榛原町遺跡分布調査概報』（榛原町文化財調査概報2） 榛原町教育委員会 1987  
 榛原町史編集委員会『榛原町史』 榛原町役場 1959

## 圖 版





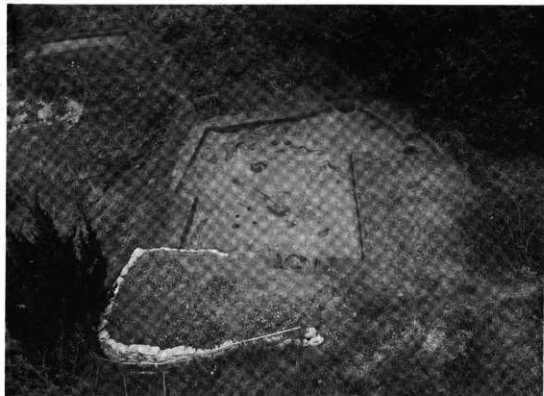


航空写真（北から）



航空写真（東から）

図版四 下井足カワタ遺跡



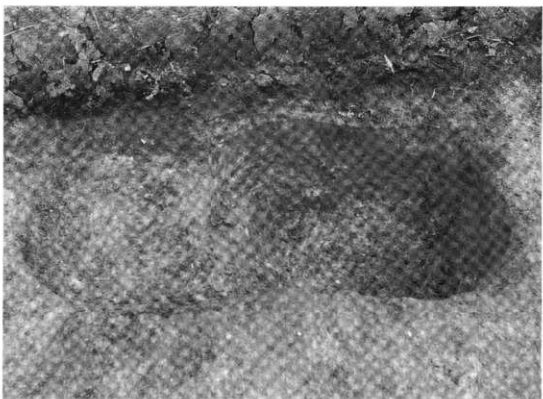
航空写真（東から）



航空写真（垂直）



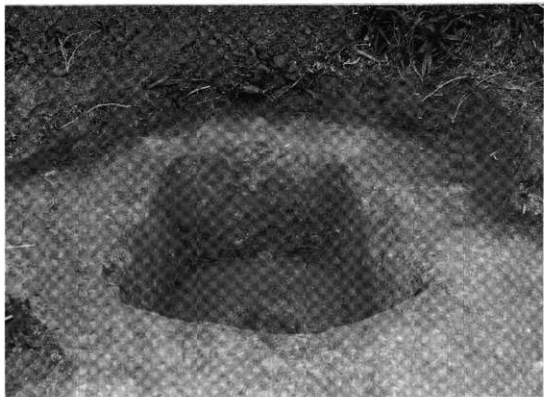
土坑01 (南東から)



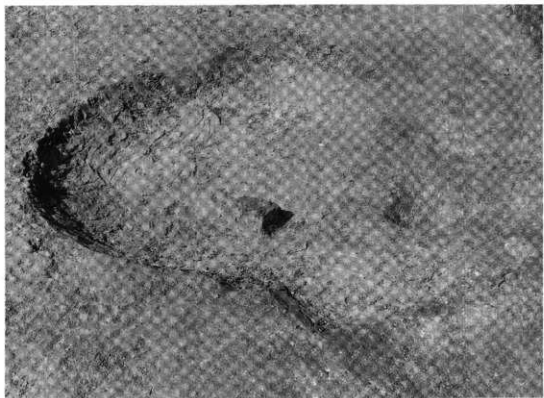
土坑02 (南東から)



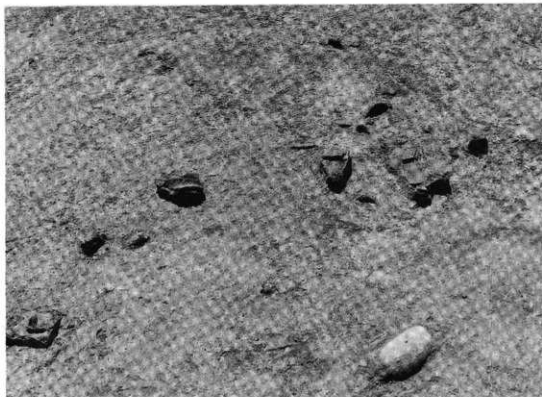
図版六  
下井足カワタ遺跡



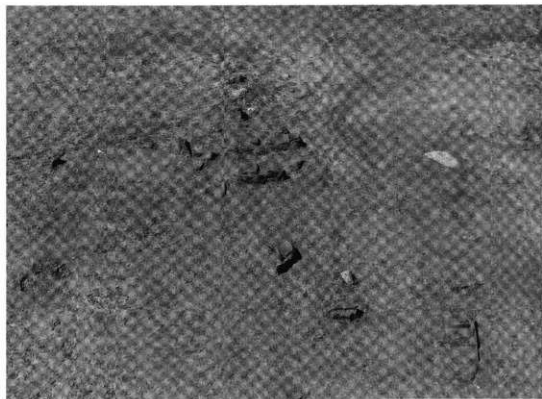
土坑03 (東から)



土坑04 (東から)

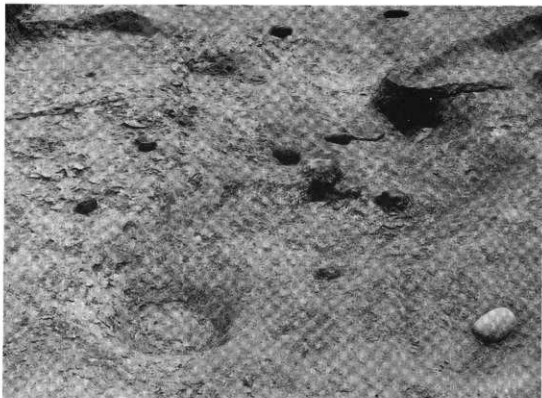


土坑05上層（北から）

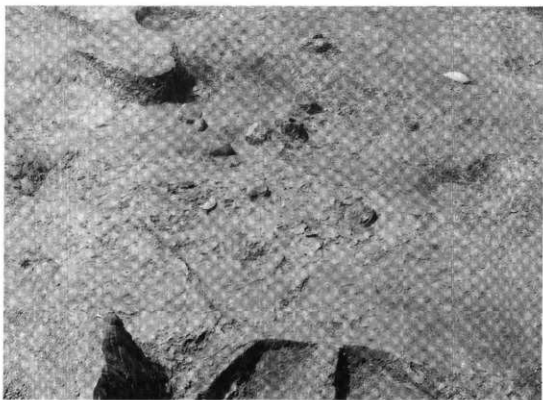


土坑05上層（東から）

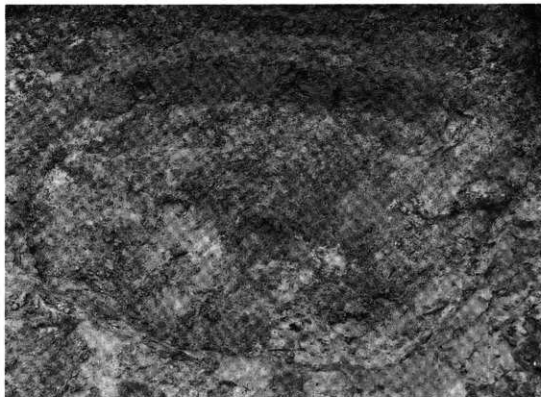
図版八 下井足カワタ遺跡



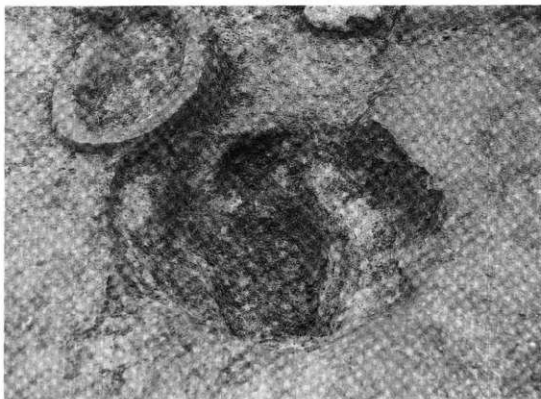
土坑05下層（北から）



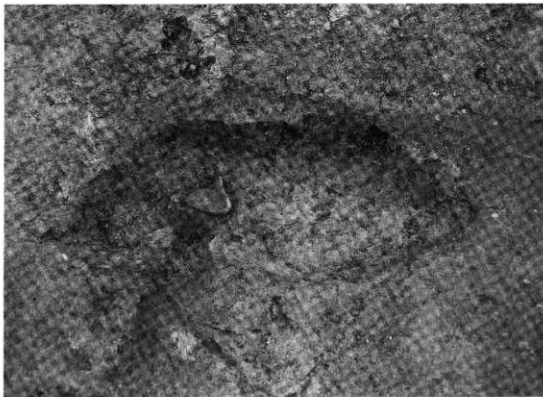
土坑05下層（東から）



土坑06 (西から)



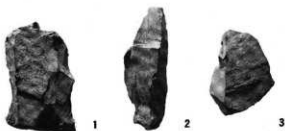
土坑07 (東から)



土坑08 (南から)

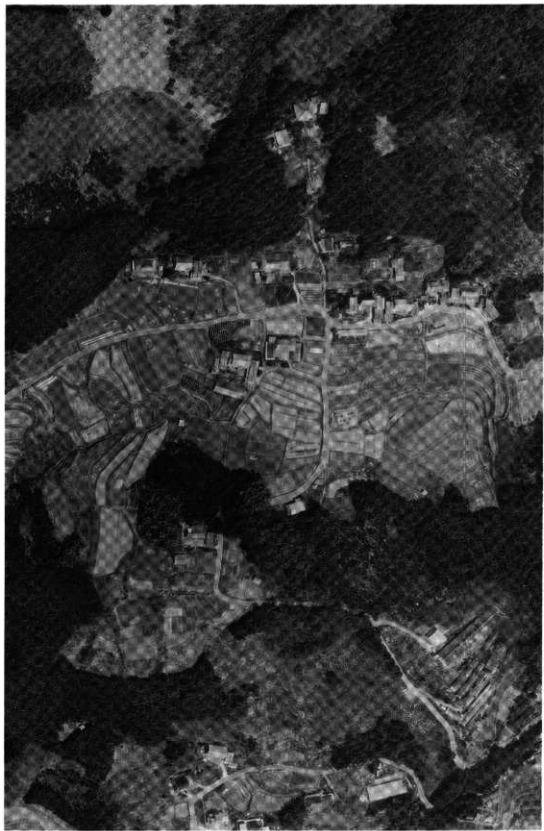


土坑06出土鉄釘



新作土出土サヌカイト片





航空写真（1981年撮影）



航空写真（南東から）

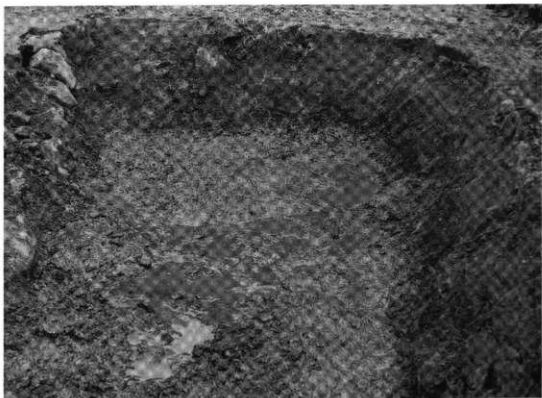


航空写真（垂直）





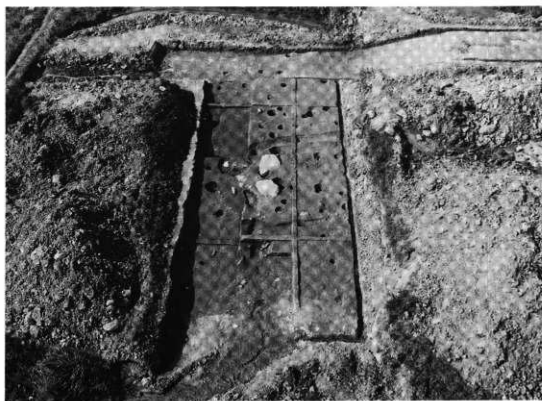
第1トレンチ (北から)



第2トレンチ (南から)



第3・4トレンチ(垂直)



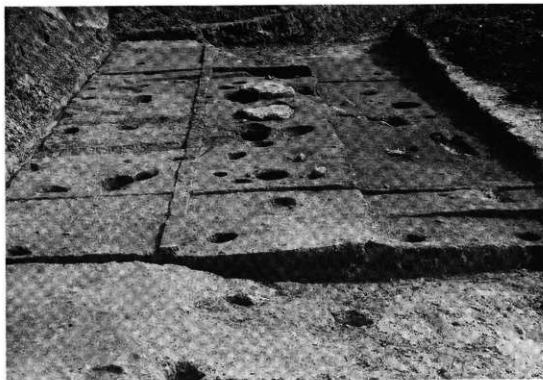
第3トレンチ(東から)



第3トレンチ拡張部 上層遺構（西から）



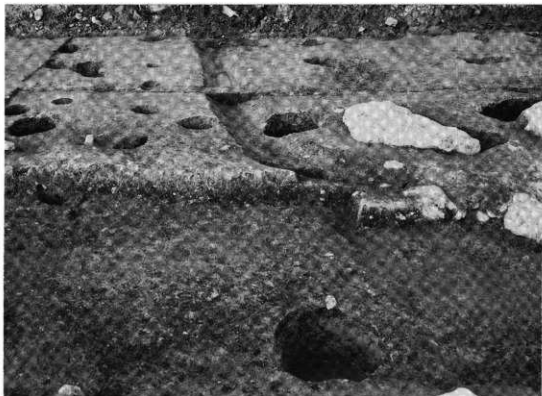
第3トレンチ拡張部 下層遺構（西から）



第3トレンチ拡張部 上層遺構（西から）



第3トレンチ拡張部 上層遺構（北東から）



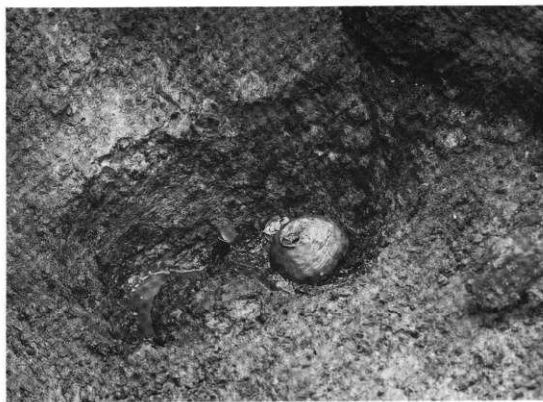
第3トレンチ 溝01 (南から)



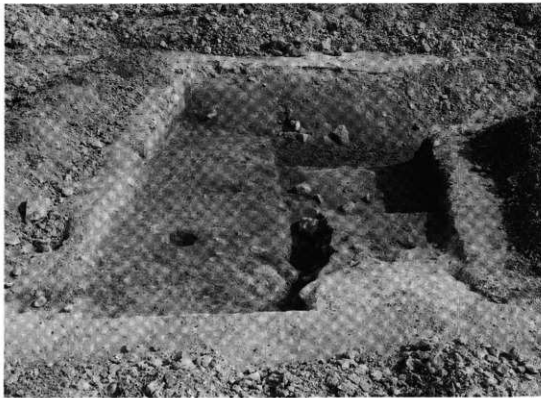
第3トレンチ 溝03 (西から)



第3トレンチ 落ち込み遺構(北から)



第3トレンチ 土坑01(東から)



第5トレンチ (西から)



第6トレンチ (西から)

**橿原町内遺跡発掘調査概要報告書 1991年度**

橿原町文化財調査概要 8

1992年 3月31日 発行

編集  
発行

橿原町教育委員会  
奈良県宇陀郡橿原町大字萩原164番地

印刷

共同精版印刷株式会社  
奈良市三条大路2丁目2番6号